

唐桑のハマ信仰

金野啓史

はじめに

本稿は昭和63年から平成元年にかけての宮城県本吉郡唐桑町に於けるハマ信仰の調査報告である。唐桑町は太平洋に臨んだ漁業の町であるが、そのような農業を主産業としない地域のハマ信仰の実態を探ろうというのが本調査の主旨であった。

ハマ信仰¹⁾は「東北地方に多い作神信仰の一つである²⁾とされ、その一部には祭りに於いて託宣により作の豊凶を聞くものも見られる³⁾。分布は岩手県から福島県にかけてと広い範囲にわたっている⁴⁾。傾向として太平洋側の内陸部にやや片寄っているが、これは作神信仰であるためであろう。

しかし一口にハマ信仰と言っても、地域によってその内容は様々であると考えられる。殊に沿岸部に於ては、内陸部と同様な作神的な信仰が見られるとは考え難いのである。このため今回の調査では、唐桑のハマ信仰にも作神的な信仰が見られるのか、また当地の生業である漁業がハマ信仰にどの程度影響しているのかという二点に、特に注意を払った。

尚調査地の選定にあたっては、1) 唐桑町が現在主生業を漁業に求めているという点で農村と対比的であること、2) 文献資料が比較的揃っていること、3) 早馬神社が現存し今も祭りが行われていることなどから信仰が消滅していないと考えられること、といった点を考慮して唐桑町を選んだ。

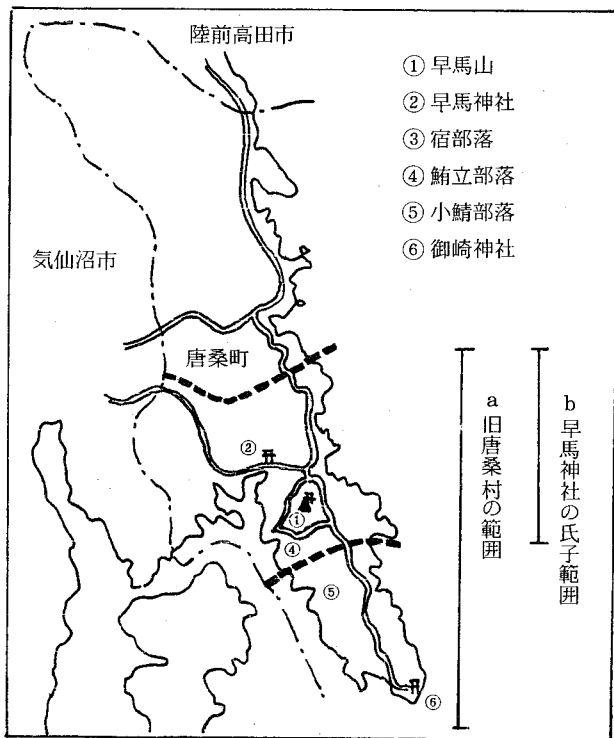


図 唐桑町地図

1

唐桑町のハヤマ信仰はこれまで既に竹内利美⁵⁾、小野寺正人⁶⁾、我妻了子⁷⁾などによって紹介されているが、本稿ではまず唐桑町の概況から述べて行くことにしたい。

宮城県本吉郡唐桑町は県最北端に位置し、唐桑半島とその付け根の部分から成る。藩政時代は仙台藩に属していたが、明治22年に唐桑、小原木の両村が合併して唐桑村となり、昭和30年に町制に移行した。人口は現在10,000人をやや上回り、その内約2,500人が漁業に従事している。一方農業も僅かながら行われているが、その大半は漁業とその兼業である⁸⁾。

東北地方の漁村の発生は比較的遅いとされるが、唐桑町も同様に近代にな

ってから漁村へと変化したものと考えられる。『唐桑村風土記⁹⁾』によれば、安永9年の唐桑村の陸上高の合計85貫451文に対し同年の海上高は4貫60文となっている¹⁰⁾。

唐桑町では明治時代後半までは非動力船による沿岸漁業が行われていたが、回游魚の沖合への移動、動力船の普及により大正時代から遠洋漁業が行われるようになった。特にカツオ一本釣り漁は戦後急速な発展が見られた。漁期は6月から9月である。しかし昭和40年頃から遠洋マグロはえなわ漁が盛んになり、カツオ漁は昭和45年をもって行われなくなった。マグロ漁の漁期は通年で、出漁期間は3カ月から1年に及ぶ。この他現在ではイカなどの近海漁業の他、カキ、ノリ、ワカメ、ホヤなどの養殖が盛んである。

一方農業は農地全体の9割が畑地で、以前は麦を中心にアワ、ヒエ、キビ等を生産していたが、昭和30年頃から大豆を主とするようになった。水田は殆どがヒドロタ（湿田）であるために生産性は低く、現在では休耕地も多いともいう。

早馬山（標高202.2メートル）は唐桑半島の付け根近くにある山で、整った山容をしている。気仙地方の漁師は付近の氷上山、五葉山などと共にこの山をヤマツブジ¹¹⁾の目標にしていた。山頂には早馬神社の山宮がある。ハヤマには他に葉山、羽山、端山、麓山などの字をあてるが、その多くが里と山地の境界にあてることから端山が本来の謂だとされている¹²⁾。当地の早馬山もこの例外ではなく、海浜に迫る山地の端に聳えている。尚この山の南腹にはムコウガモリと呼ばれる墓地があるが、これは明治になって設けられた村（町）宮の共同墓地だという。

以上唐桑町の概況に就いて述べてみたが、この町が近代以降主要な生業を漁業、特に遠洋漁業に求めていることが判らうかと思う。

尚、以下唐桑という場合には、特にことわりのない限り小原木村との合併以前の唐桑村の地域を指すことにする（図中aの地域）。

早馬神社は半島の先端にある御崎神社（日高見神社）と共に唐桑の氏神社である。早馬山北西の宿部落に社殿を構え、早馬山頂の祠堂を山宮とする。祭神は倉稻魂命である。勸請年代は不明だが『唐桑村風土記』に「誰勸請ト申儀并年月共相知不申候處倉稻魂命相祭候由申傳候連々神威衰候ニ付別當良嚴院中興大和守慶永正慶元年再興仕候（後略）¹³⁾とある。良嚴院とは現在宮司を勤める梶原家のことで、当家に伝わる『風土記御用書上扣』なる文書¹⁴⁾には、初代専光坊景実が建保5年に兄梶原景時の御影と共に唐桑に至り堂を構え¹⁵⁾、後に彼を頼ってこの地に入った一族の梶原大和守景永が早馬大権現と御崎明神の別當を勤めるようになったと記されている。二つの資料の間には年代的に辻褃の合わない点もあるが、いずれにしても良嚴院を早馬神社中興の祖と考えて間違いはなからう。

この良嚴院はかつては本山派に属する修験者であった。早馬神社は山号を早馬山、寺号を漢蔓寺と称していた。「宝暦十年五月ヨリ准小先永々勤候様大先達良覚院ヨリ被仰渡候事」という一文が『風土記御用書上扣』に見え、周辺八カ村の支配を任されたことが記され、更に末院四カ所、脇院二カ所が挙げられている。尚良嚴院は当初御神神社の別當も兼ねていたが、元禄年間¹⁷⁾に千手院がこれに代ったとされている。

早馬神社の祭りは旧暦の9月19日に行われる。中心は神輿の渡御だが、これは「神様が人々の生活ぶりを見て、穢れを拾ってまわられるからだ」と説明される。但し『風土記御用書上扣』には「毎年九月十九日式日二而神曳湯立神楽別當良嚴院境内祭場ニ而修行仕候」とあり、更に7年に一度神輿の渡御が行われると記されている。湯立神楽が廃され神輿の渡御が毎年行われるようになったのがいつ頃のことなのかは判らないまでも、当地のハヤマ祭りの古態を探る上で注目される。

かつては祭りの精進潔斎は厳しく、氏子総代をはじめとして御陸尺（神輿を担ぐ人）、役持ち（旗や幟などを持つ人）、神輿を乗せる船の船頭などは一週間前から水垢離をとっていたという。だが現在ではこの風はなく、良嚴

院のみが注連縄を張っている期間中肉食を断っている。またカツオ漁の行われていた時代には一勢に漁を休んで唐桑中の人々が祭りに臨んだというが、このようなことも今日では見られなくなってしまった。

「権現様（早馬神社をいう）にはナライカゼ、愛宕様には雪が降る」と昔から唐桑ではいう。その冷たいナライカゼの吹く旧暦9月19日の朝方、御陸尺や役持ちなど祭りの参加者は早馬神社に集合する。白装束になり神酒で身体を暖めている頃、宮司、近郷の神宮等によって神輿に神体が移される。神輿の出発は大体午前10時頃である。宮司、神官、氏子総代等も加えて総勢40人程の一行である。

バレンと呼ばれる紙花の飾られた宿の町中を通して、神輿は早馬山をやや登った所にある御旅所へ行く。ここでは祝詞をあげるが、土地の人々はこれをゴキトウと呼ぶ。宮司によれば山頂でゴキトウをするのが本当だが神輿を担いで急峻な山道を登る訳にも行かないので、この御旅所で行うようになったのだということである。

この後一行は同じ道を下って宿浦港まで行き、そこから船に乗って御崎の沖まで行く。船はカキ取り船やイカ釣り船を宿、^{しびたち} 鮪立、^{こさば} 小鯖の三部落が回り番で出す。これら三部落が船を出すようになった由来は詳かではない。鮪立、小鯖は先払いとお召し船（神輿の乗る船）の二隻を出す、宿が船を出す年にはこれに御供船がつく。

宿浦港を出ると一行は途中鮪立と小鯖に立ち寄ってゴキトウを行い、御崎沖まで行くと海上を三度回ってアラシオを汲む。宿浦港にある御旅所でミソギをすると早馬神社に戻り、午後一時頃から直会となる。宮司の説明によると、神輿が御崎の沖まで行くのはそれによって唐桑全体の穢れを拾ったことになるからであり、拾った穢れを宿浦港で落して清らかになるためにこれをミソギと呼ぶのだという。

神供は神社本庁の指導に従っているというが、この中にネネウと呼ばれるマグロ、サケなどの丸ものが供えられるのは、漁業の町の特色であろう。また餅はオジュウハチャ（祭りの前日）に各家庭で搗いたものを供えたというが、今日ではこの風は殆ど見られなくなっている。

以上のような唐桑のハマ祭りを見てみると、神輿の渡御にしても湯立神楽にしても、祓いの観念が根底にあることが判る。これは後述するように早馬神社がムラ氏神として祀られていることによるのかもしれない。

福島県地方のハマ祭りでは託宣を併うものが見られるが、当地では託宣はもとより年占的な行事も見られない。小野寺正人によれば託宣を併うハマ祭りは宮城県内に於ては見られないとのことで、小野寺はこれを「弥陀のりハラ執行御詮議帳」という文書の存在から仙台藩の政治姿勢によるものと推測している¹⁸⁾。

現在の唐桑の主生業は漁業だがこれはそう古くからのことではなく、以前は麦などを中心とした農業に生活を委ねていたものと考えられる。そのため古い時代に於ては早馬神社も作神的に信仰されていた可能性はある。早馬神社の祭神が倉稻魂命であることは、このことの一つの論拠になるかと思われる¹⁹⁾。

しかし現在の早馬神社の祭りを見る限りに於ては、そこに作神的な信仰を見出すことは難しい。我妻了子はオジュウハチャに搗いた餅を供える風を作神の信仰の表れとして捉えているが、餅を神供とすることは作神に限らず一般的であり、一概にこれをもって当地のハマ信仰を作神的な信仰であるとすることはできないであろう。

3

早馬神社は御崎神社と共に唐桑のムラ氏神として祀られており、唐桑は両社の二重氏子という形になっている。戦後になって両社は氏子分けを行ったが、これは伊勢神宮の大麻頒布の地域を分けるためのものである（早馬神社の氏子の範囲は図中bの地域）。

岩崎真幸はハマ神社がムラ氏神である例は極めて少ないと述べているが²¹⁾、当地の早馬神社はこの点で一つの特色をなしている。唐桑が早馬、御崎両社の氏子であることは、かつて良巖院が両社の別当を勤めていたことに由縁するものであろう。

「法印さん」と呼ばれる修験者が神道的儀礼を行い東北地方の民間信仰の中に浸透していったことは和歌森太郎などによって明らかにされているが、²²⁾早馬神社の宮司を勤める良巖院もかつてはそうした「法印さん」であった。

唐桑の各部落には早馬神社、御崎神社に対して「部落の氏神様」と呼ばれる神々が祀られており、家々では屋敷神としてウジクラサマ（ミョウジンサマとも呼ばれる）²³⁾が祀られている。これらの祭日には両社の内いずれかの神職が赴いて祭儀をとり行う。またヒゴモリという女性達の講では、1月と12月に良巖院に集って宮司の話を聞き飲食することが行われる。これらは良巖院がかつて「法印さん」として村の様々な祭儀を行ってきたことの名残りと考えられる。早馬神社は今日唐桑のムラ氏神として信望を集めているが、その背景には別当を勤めてきた「法印さん」のそうした活躍があったことは無視できないであろう。

唐桑が漁業を主生業とすることは再三述べてきた通りだが、このことは早馬神社の祭祀にも影響しており、当地のハマ信仰の特色となっている。

カツオ漁の行われていた昭和40年頃には、唐桑では漁期の前後にオヒマチという行事が行われていた。カツオ漁の場合、一年の漁のはじまる旧暦5月頃にデブネヒマチ（出船日待）が、漁期の終了した旧暦9月頃にアガリヒマチ（上り日待）が行われた。このオヒマチは船員一同で唐桑中の神社を参拝するもので、早馬神社、御崎神社はもとより「部落の氏神様」にも隈なく参拝して歩く。デブネヒマチは豊漁と航海安全の祈願、アガリヒマチはその感謝であるが、後者に於ては早馬、御崎の両社や日頃から深く崇敬する神社にネネウを一尾づつ供える。

このオヒマチは遠洋マグロ漁が主体となった今日では一回の出漁の前後に行われるようになっており、時期的には定っていない。これは一回の出漁期間が三ヶ月から一年と長く、適当な休暇期間をはさんで随時出漁するようになったための変化と考えられる。

また出漁後、残った家族が吉日を選んで唐桑中の神々を参拝して歩き、船員の無事と豊漁を祈ることも行われる。早馬山の女人禁制の風は古くから消滅していたが、これは出漁中に妻などが登拝しなければならなかったため

ある。

このように豊漁と航海安全の祈願、感謝がなされ、その際にネネウが供えられることは早馬神社の特色であり、当社が漁業神的にも祀られていることを示している。参考までに昭和40年頃の年中行事の内漁業に関連したものを挙げると表のようになる。ハツノリを除くといずれの行事にも何らかの形で

表 唐桑の漁業関連年中行事（昭和40年頃）

月日	行事名	内容
1月2日	ハツノリ	かつて漁師の家ではこの日に子供が船主の家にいき、祝言を言いミノチンをもらった。（昭和40年頃になると船主に挨拶するのみになる。）
1月15日	大漁唱い込み	宿部落の子供達が鯛形に切った紅白の紙（良厳院が用意する）を棒の先に下げて徒党を組み、「ヘイヨイヘイヨイ」と唱えながら家々をまわる。家々では御祝儀（金銭）をあげる。
1月吉日	ハママツリ	各浜（漁港）に祀られているオエビスサマの祭り。神職がオエビスサマの祠を祓い、付近の民宿またはその浜の漁業組合長（祠の管理者）の家で直会をする。
3月吉日	ウラマツリ	宿、鮪立、小鯖の三部落で行われる。海上に出て祈禱をした後、隣の部落との境まで行き、リョウゴ船（リュウグウ船ともいう）を流す。リョウゴ船には米、塩、餅、銭をのせ「大漁丸」と書いた帆を立てる。流した部落の者が拾ってはならず、必ず隣の部落の者に拾わせる。大漁祈願のための行事と説明される。
5月吉日 (カツオ漁の場合)	デブネヒマチ	一年の漁の開始にあたって船員一同が唐桑のあらゆる神々を参拝して歩き、豊漁と航海安全を祈る行事。
9月吉日 (カツオ漁の場合)	アガリヒマチ	一年の漁を終えた後に船員一同が豊漁と無事を感謝する行事。内容的にはデブネヒマチに同じ。但し早馬神社、御崎神社などにネネウを供える。
10月20日	恵比須講	オエビスサマの祭り。この日神社から恵比須の神像が配られ、家々では神棚にドンコ（魚名）を供える。また船主は船員らを招いて大盤振舞いをする。

※ 祭日はすべて旧暦による。

早馬神社が関与しているが、これを見ても早馬神社が漁業の信仰に不可欠な存在であることが判ろうかと思う。

しかしオヒマチに見られるような漁の祈願は早馬神社のみに見られる特色ではなく、唐桑の神社全般にわたって見られるものであることには注意を払わなくてはならない。オヒマチでは早馬神社と共に各部落に祀られている天神、八雲、諏訪、熊野などにも参拝する。例えば天神を学問の神として理解しながらも漁の守護を求めるのである。つまりオヒマチはあらゆる神々に祈願することによって漁の万全を期そうとする船員達の心意の表れなのである。早馬神社への漁の祈願もこれと同様な心意によってなされるものと考えられる。ただムラ氏神であるが故に、早馬神社は他の「部落の氏神様」よりも深く漁の信仰に関与しているのである。

また、漁業神的な信仰が見られることは早馬神社の特色の一つではあるが、このことは当社の性格をそのままに示すものではない。

唐桑では漁業神として浜毎に祀られているオエビスサマ（事代主命）が特に広く信仰されている。このオエビスサマの主な祀り手は漁師であり、祭日は旧暦1月のハママツリと旧暦10月の恵比須講で丁度かつての一年の漁期をはさむ形で行われており、²⁴⁾信仰の内容は豊漁の祈願に限られると言って良い。

これに対して早馬神社への信仰は漁業のみに限定されたものではない。早馬山頂の祠堂に奉納された赤布片や剣には豊漁や航海安全ばかりでなく、病平癒、学業成就、或いは出征兵士の無事を祈るものなど様々な内容が見られた。²⁵⁾このように早馬神社への信仰は生活全般にわたっており、漁の信仰はその中の一つでしかない。この点で早馬神社とオエビスサマとは共に漁の祈願がなされるとはいえ、質的には大きく異なるのである。

「何につけても早馬神社のお世話になる」と或る古老は語っていた。早馬神社は初宮、七五三、厄払い、大祓（死後十日目に家を清めるために行われる祓い）などの通過儀礼に尽く関与している他、家内安全、交通安全、病平癒などの様々な祓いを行っている。早馬神社はあくまでムラ氏神として唐桑の人々に祀られているのである。唐桑では出漁中の船員の事故や病気、或いは不漁が無縁で伝えられると、家族は山宮に詣りオヒカリ（蠟燭）を灯して

祈願をする。これなどはムラ氏神であるが故の祈願であると考えらるべきである。早馬神社に対する漁の祈願は、他の「部落の氏神様」と同様に、漁業の隆盛によって発揮された氏神の持つ機能のあらわれなのである。

結 語

唐桑のハマ信仰の特色としてまず第一に挙げられる点は、早馬神社がムラ氏神として唐桑の民間信仰の中心に位置し、人々の生活を様々な形で守護しているということである。前述したようにハマ神社がムラ氏神である例は極めて少ないと指摘されるだけに、このことは当地のハマ信仰を見る上での最も重要な点であると思われる。

今回の調査の目的は非農村に於けるハマ信仰の実態を探ることにあつた。当地のハマ信仰には漁の祈願がなされるなど漁業神的な信仰が見られ、漁業を主生業とする唐桑の地域性が表れている。しかしそうした漁業神的な信仰は漁業の隆盛に併って新たに加わった要素であり、しかもそれはムラ氏神の持つ機能の一端でしかない。オエビスサマのような漁業神がまず信仰され、次いで早馬神社などの他の神々にも漁の祈願がなされるようになったというのが唐桑の生業の変化に応じた信仰の変化の道筋であろう。早馬神社への漁の祈願はあくまでムラ氏神に対してのものなのである。

当地のハマ信仰も古くは作神的な信仰であつた可能性はあるものの、その痕跡は現在見出し難い。ハマ信仰は作神信仰の一つであるとされるが、早馬神社がムラ氏神として祀られ幅広い内容の信仰を持つという点で、唐桑のハマ信仰はそうした一般的なハマ信仰と性格を異にするのである。

尚筆者は同じく沿岸部のハマ信仰として他に宮城県雄勝町大浜、岩手県陸前高田市などで調査を行っているが、当唐桑町の調査も目下継続中であることをおことわりしておく。最後になってしまったが、今回の調査に御協力下さった話者の方々に心から感謝したい。

<註>

- 1) 岩崎真幸はハヤマ信仰を「普通「はやま」と呼ばれる山岳、神祠、あるいは「はやま」神に対する信仰を指す」（「託宣儀礼およびノリワラについての若干の考察——ハヤマ信仰を通して——」『東北文化研究所紀要』第14号 1983年）としているが、本稿でも単にハヤマ信仰と言う場合はこのようなものを指すことにする。
- 2) 岩崎敏夫 「はやましんこう」 大塚民俗学会編 『日本民俗事典』 1972年 弘文堂
- 3) 岩崎敏夫 『本邦小祠の研究』 1963年 岩崎博士学位論文出版後援会 等を参照のこと。
- 4) 岩崎真幸 前掲書
- 5) 竹内利美 『日本の民俗4 宮城』 1974年 第一法規出版
- 6) 小野寺正人 「陸前の山岳信仰とはやま信仰」 月光善弘編 『東北霊山と修験道』 1977年 名著出版
- 7) 我妻了子 「羽山神社の祭」 岩崎敏夫編 『東北民俗資料集』四 1971年 万葉堂
- 8) 唐桑町史編纂委員会編 『唐桑町史』 1968年 宮城県本吉郡唐桑町 竹内理三編『角川日本地名大辞典4 宮城県』 1979年 角川書店 および筆者の調査による。
- 9) 宇野脩平 『陸前唐桑の史料』 1955年 日本常民文化研究所 所収
- 10) 前掲書。尚、数値を貫文で表示しているのは、仙台藩が幕末まで石高を貫高で表示していたためである。
- 11) ヤマツブシはヤマアテに同じ。早馬山、亀山（大島）、氷上山、五葉山、早池峰山などを用いて船から陸までの距離を測るもので、例えば五葉山が見えなくなることをゴヨウツブシと言い、陸から約70マイル離れたことになる。
- 12) 岩崎敏夫 「はやま神の性格」 『日本民俗学』1-3 1953年
- 13) 宇野脩平 前掲書所収
- 14) 良巖院（梶原家）所蔵の文書で年代は不明だが享保年間のものと推定される。
- 15) この堂は現在仏堂として石浜部落に残る梶原堂であるとされる。
- 16) 良巖院によれば景永の字が正しいとされる。

- 17) 『風土記御用書上扣』による。
- 18) 小野寺正人 前掲書
- 19) しかし当地には作神としてノウズラサマがあり、3月と9月の16日を祭日としている。このため早馬神社の信仰が作神的なものであったのか否かに就いては、にわかには断定はできず更に一考を要する。
- 20) 我妻了子 前掲書
- 21) 岩崎真幸 「ハマヤ信仰における祭祀組織の一考察——祭祀組織の持つ社会的役割およびイニシエーション儀礼について——」『東北文化研究所紀要』第13号 1982年
- 22) 和歌森太郎 「修験道の侵透」 和歌森太郎編 『陸前北部の民俗』 1969年 吉川弘文館 等を参照のこと。
- 23) 「部落の氏神様」は唐桑の各部落で祀る神々であるが、通常は単に「氏神様」と呼ばれる。熊野、金毘羅、八雲、愛宕、天神、安波、諏訪など様々であるが、一般に現在別当を勤める家が勧請したケースが多いとされる。またウジクラサマは稲荷であるとされ、神棚に対する外宮であると考えられている。分家をすると必ずその屋敷内に神明造りのウジクラサマが建てられる。唐桑では9割を超える家々が祀っているという。
- 24) これらの祭儀は図中bの範囲では良巖院が、それより南では千手院が行う。これは氏子分けが行われる以前から慣例的に行われていたという。
- 25) 山宮は平成元年6月に造り替えられたが、この新しい山宮にはこれらのものは見られない。